2017年6月18日

福音書からのメッセージ

また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。
（マタイによる福音書9章36節）

今日の箇所には、イエス様が町や村を回る姿が描かれていました。来る日も来る日もいろいろな場所で、今、必要とされている人のところに向かう。これがイエス様の姿です。ではイエス様の原動力は、どこからきたのでしょうか。

聖書にはこうあります。「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」と。イエス様は群衆を深く憐れみました。目に入るのは飼い主のいない羊のような群衆の姿です。羊は弱く、目も悪く、臆病で、自分たちの力だけでは何もできません。羊飼いなしには水場に行くことも、安全な場所で眠ることも、外敵の攻撃を避けることもできない。それが羊です。

イエス様の目に飛び込んできたのは、まさに弱り果て、打ちひしがれた羊のような群衆の姿でした。何も手につかない。生きるのがつらい。全身から力が抜け、目はうつろで、どうすることもできない。そんな姿です。イエス様はその彼らを見て、深く憐れみます。「憐れむ」というと、「かわいそうに」というニュアンスを抱くかもしれません。しかし原語の意味は違います。ある人はこの語を、「わが『はらわた』、彼のために痛む」と訳しました。内臓がよじれるかのように、かきむしられるかのように、痛い。それが群衆を見たイエス様の感情なのです。

イエス様にとって、群衆の痛み、苦しみは、他人事ではありませんでした。イエス様は自らのはらわたで、痛み、苦しみを感じられていた。これが聖書のいう憐みであり、イエス様が群衆に対し、そしてわたしたちに対して抱かれる思いなのです。

イエス様の宣教は、ここから始まりました。つまり、イエス様が群衆を深く憐れんだということがスタートなのです。イエス様は群衆の苦しみや痛みに共感したからこそ、教え、福音を宣べ伝え、病気や患いをいやしたのです。教会に求められていることも、同じです。イエス様はわたしたちにも、同じようにしなさいと命じられています。

しかしその行動の根本に憐れみがないと、それは宣教とはいえません。どんなに上手に説明しても、希望を語ったとしても、その根底に神さまの憐みがないと、それは意味のないもの、神さまのみ心にそったものではないのです。

わたしたち自身、神さまから一方的に憐れんでいただきました。神さまの元から迷い出た羊であるわたしたちを導き、歩ませてくださいました。この喜び、感謝を伝えたい。わたしたちがそうであったように、打ちひしがれ、倒れている人と、心をひとつにしたい。その思いがイエス様のいう宣教なのです。

神さまはあなたのことを大切にしている、憐れんでいる。そのことを一人でも多くの人と分かち合ってほしい。それが神さまの思いです。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/